

本から 時代を読む

無職・パート労働・フルタイム勤務の母親の比較調査では、子どもとの世話をできない、という罪悪感は、仕事の有無を問わず高い。さらに、子どもに対する否定的感情から生じる罪悪感、あるいは、自分のために時間を使うなど母親役割を担つていないう時に感じる罪悪感は、仕事をもたない母親の方が、有職の母

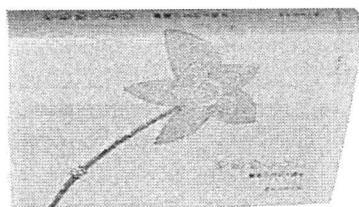
親よりも強く罪悪感を感じていることが示される。無職の母親においては、子どもに対する罪悪感が大きいほど、子育て達成感も大きいという結果が示されており、「母親」という社会的役割が、母親自身、特に、さまざまな理由から仕事を持たない母親に罪悪感を抱かせつつ子育てに向かわせる装置となつていることが示唆される。

さて、実はここにあげた4冊の編著者は、すべて72年以降生まれ。それぞれ、著者たちの博士論文をベースに書かれたものである。いずれも専門領域内の話にじどまらず、いまの社会や自分たちの生活と

のつながりを意識した内容であり、専門家でなくとも身近な話題として読めるようになっている。特に、今川紹介した研究は、当事者の視点が強く意識されているという点で特徴的である。

「少女」「寡婦」「母親」や、外部のものとして客観的に論じるのではなく、当事者である読者、寡婦自身、子どものいる母親（無職、有職を問わず）の置かれている社会状況を丁寧に読み解いていくのだ。

『軍事組織とジェンダー』（自衛隊の女性たち（慶應義塾大学出版会））の佐藤文香は72年生まれ。『帝国と暗殺—ジェンダーカラムの近代日本』（新曜社）の内藤千珠子は73年生まれである。私自身は69年生まれだが、同じ年、プラスマイナス2歳くらいの研究



椎野若菜
『やもめぐらし—軍婦の文化人類学』
明石書店 07年5月、3360円

者たちは、自分自身の方向性の模索に苦悩し、フェミニストとしての生活や人生の在り方に試行錯誤し、就職先の少なさに悩んでいる人が多い。72年組は、こうした困難を抱えつつも、う

まくキャリアの軌道に乗つているようにみえる。普段は世代で語ることにそれほど意味があるとは思っていない私も、変換点を感じざるを得ない。

単純に、修士過程に在籍する女性院生数だけ見ても、90年の1万人から2005年には5万人に伸びている。研究者数が増え、ジェンダー論が普及し、ジェンダー的な視点を持つ人材が目立ってきたということとなるのかもしれない。ジェンダー研究を専門とする教育や先輩院生の

層に厚みができていているという状況もある。ジェンダー研究者コミュニティが成熟してきた現状のあらわれとも言える。

ところで、72年といえば、日本のウーマンリブが盛り上がりを見みせていた時期だ。西村光子『女たちの共同体 70年代ウーマンリブを再読する』（社会評論社）では、ウーマンリブの活動家たちの共同生活の場「コレクティブ（共同体）」で、リブの闘士たちがなにを問題としていたかが紹介されている。これまでにも、ウーマンリブについての記録や論考はたくさんあるが、

本書は、リブ世代の著者が、著名人によつて語られているリブ以外のウーマンリブの在り方をもがり出している。前掲した4冊に共通する当事者視点は、ウーマンリブといった「女性運動」自体を捉え直す際にも有効だといふことがわかる。連續と統く女子の歴史は、その他大勢とされてきた当事者の新たな視点を得ることによって、今までに読み合えられつつあるのだ。

みずしま・のぞみ 1969年、岐阜県生まれ。京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。理学博士。共著に『労働のジェンダー化』『風俗業者意識調査』『今月のフェミニズム』など。

女たちの共同体



西村光子
『女たちの共同体 70年代ウーマンリブを再読する』
社会評論社 06年1月、1735円